

日常場面におけるリアリティ・モニタリング・エラー経験の主観的評価と自己意識の関連

○ 柏原志保^{1,4}・小林隆昌¹・井加藤美幸²・中嶋智史³

(¹ 広島大学大学院教育学研究科・² 広島大学大学院医歯薬保健学研究科・

³ 広島修道大学健康科学部・⁴ 日本学術振興会特別研究員)

問題と目的

知覚由来の記憶と、内的に生成した記憶を弁別する認知過程をリアリティ・モニタリング (RM) という (Johnson et al., 1993)。適切な RM には、主体感や所有感などの瞬間的な自己意識や、物語自己のように時間的に連続した自己意識を安定的に保持できていることが重要である。これまでに実験課題による RM 成績と主体感の関連が報告されてきたが (e.g., Sugimori et al., 2011)、二次変数が統制された実験室内で単純な単語刺激を用いる実験で測定される RM 成績と、日常生活での RM エラー経験との間には関連がないことが示唆されており (中田・森田, 2014a)、日常的な RM エラー経験の主観的報告と、主体感を始めとする自己意識の関連についても検討する必要がある。

そこで本研究では、日常場面での RM エラーの経験頻度の主観的報告と、主体感や所有感、物語自己との関連を検討する。

方法

参加者と手続き 大学生 102 名に講義で質問紙を配布した。回答不備 1 名を除外し 101 名 (男性 47 名, 平均 19.4 歳, $SD=0.6$) を分析対象とした。

質問紙 日常的な RM エラー経験の個人差を測るため、リアリティ・モニタリング・エラー経験質問紙 (RMEEQ; 中田・森田, 2014b) を用いた。全 32 項目について、5 件法 (4: 非常によくある—0: まったくない) で回答を求めた。

自己意識の不安定さを測るため、Embodied Sense of Self Scale (ESSS; Asai et al., 2016) を用いた。所有感、主体感、物語自己の 3 因子全 25 項目について、5 件法 (1: まったくあてはまらない—5: 非常によくあてはまる) で回答を求めた。

統合失調型パーソナリティ傾向を測るため、日本語版 SPQ-B (伊藤他, 2008) を用いた。全 22 項目について、体験の有無を 2 件法 (1: はい, 0: いいえ) で回答するよう求めた。統合失調型パーソナリティ傾向は RM および自己意識の異常との関

連が報告されており、本研究でも疑似相関の可能性を排除するため SPQ-B を統制し分析を行った。

結果と考察

各尺度の合計点の平均を算出し、SPQ-B を統制した偏相関分析を行った (Table 1)。その結果、RMEEQ と ESSS 主体感 ($r = .561$)、物語自己 ($r = .407$)、所有感 ($r = .312$) の間に有意な正の相関があった ($ps < .01$)。よって、主体感や所有感、物語自己といった自己意識が不安定なほど、日常場面の RM エラーを経験しやすいことが示唆された。

Table 1
各尺度の記述統計量と偏相関係数 (統制変数: SPQ-B)

	平均 (SD)	ω	2	3	4
1. RMEEQ	50.30 (24.43)	.952	.312 **	.561 **	.407 **
2. ESSS 所有感	20.39 (6.23)	.729	-	.320 **	.354 **
3. ESSS 主体感	24.69 (5.15)	.648	-	-	.335 **
4. ESSS 物語自己	28.51 (4.89)	.625	-	-	-

注) ** $p < .01$ 。

次に、RMEEQ を目的変数とする階層的重回帰分析を行った。ステップ 1 で SPQ-B (共変量) を投入し、ステップ 2 で ESSS の 3 因子 (説明変数) を投入した。その結果、ステップ 2 で説明率が有意に上昇し ($\Delta R^2 = .335, p < .01$)、主体感 ($\beta = .450, p < .01$) と物語自己 ($\beta = .249, p < .05$) が RMEEQ を予測した ($R^2_{adj} = .417, F(4, 96) = 18.88, p < .001$)。これは、従来実験による RM と関連が検討されてきた主体感の異常が日常場面における RM エラーとも関連していることを示すとともに、物語自己の不安定さも日常場面の RM エラーに影響することを示しており、時間的に連続・一貫した自己意識が持ちにくい人は、日頃 RM エラーを経験しやすい可能性がある。

引用文献

- Asai et al. (2016). *Front Psychol.*, 7, 1005.
 伊藤他 (2008). 日本社会精神医学雑誌, 17, 168-176.
 Johnson et al. (1993). *Psychol Bull.*, 114, 3-28.
 中田・森田 (2014a). 日心第 78 回大会発表論文集, 453.
 中田・森田 (2014b). 心理学研究, 85, 168-177.
 Sugimori et al. (2011). *Q J Exp Psychol.*, 64, 169-185.